

7月の第三月曜日が祝日で、ひと月とばしの例会。暑いなか、10人が元気に顔を合わせ、太平記に挑みました。今回はいよいよ前半のクライマックス、鎌倉幕府の滅亡。後に対立する新田氏と足利氏が裏面で連携しながら、怒涛の攻撃を繰り広げた合戦劇をたどりました。9月も祝日の関係で例会は休み。そこで紀州の田辺・湯浅に旅することになりました。この日、読んだ箇所は以下のようにです。

(一) 長崎次郎禅師御房を殺す事 (二) 義貞叛逆の事  
尊氏、義貞の謀反露見 (p99～102)

人質の尊氏嫡子千寿王が行方をくらました。伊豆にいた庶子の竹若も逃亡するが、北条方に見つかり斬られる。一方、新田義貞も、戦費調達にきた幕府の使節を新田庄の世良田で斬り、叛意を明白にする。この二件で、いよいよ、足利・新田 vs 北条の鎌倉攻防戦が始まった。

※**尊氏の子どもたち** 尊氏には惣領の兄高義がいて、自分足利一族の庶家から妻を娶った。その子が竹若。ところが兄が夭折して思いかげず家督を継ぐことに。そこで、北条氏の名門赤橋家から正妻を迎える。登子といい、二代將軍となる義詮、初代鎌倉府公方基氏を生んだ。ほかに身分不詳の女「越前局」に産ませた直冬がいるが、尊氏は認知せず、後に父子間の戦闘に発展する。

(三) 天狗越後勢を催す事

義貞、挙兵し、鎌倉街道を南下 (p103～106)

義貞は元弘3年(1333)5月8日、新田荘内の生品神社で挙兵、高崎の辺まで西進した後、利根川を越えて武蔵国に進撃した。これは越後の新田一族と合流するための予定の行動だったようだ。4日後の5月12日には世良田で千寿王が挙兵、直ちに利根川を渡河し、鎌倉街道で新田軍に追いついた。

※ **新田岩松氏の役割**

千寿王が新田荘世良田で挙兵したのは、鎌倉脱出後、ここに匿われていたのかもしれない。また、義貞挙兵後、間髪を入れず出撃し、新田軍と合流して鎌倉攻撃に臨んでいるのも、新田・足利両氏間の事前工作を伺わせる。その間の橋渡し役が新田岩松氏ではなかったか。岩松氏は新田一族ではあるが、その祖岩松時兼は新田義兼の娘と足利義純との子である。つまり、新田、足利両氏は系譜の上で深い関係があった。岩松氏関係文書の中には、鎌倉攻撃に先立つ元弘3年4月22日付で、尊氏から岩松氏当主に宛てた「北条高時退罰御内書」と題する文書目録が残されており、両氏が蜂

起前から連絡を取っていた証拠と目されてきた。

(四) 小手指原軍の事 (五) 久米川合戦の事

新田軍、連戦、連勝 (p108～112)

北条方は新田軍を撃破しようとして一門の桜田貞国を大将とする大軍を鎌倉街道に投入し、5月11日、入間川南方の小手指原で初めて両軍が激突。新田軍は、久米川に退いた北条方をさらに分倍河原へ追い詰めた。

(七) 大田和源氏に属する事

三浦一族大田和氏の援軍で活路 (p116～118)

15日、鎌倉から北条泰家の援軍が分倍に到着し、その勢いで勝利するが、翌16日、大田和氏初め関東一円の反幕府勢が参戦して北条方は大敗し、鎌倉に退く。

(八) 鎌倉中合戦

新田義貞、稲村ヶ崎を突破 (p120～130)

18日、鎌倉に突入した新田軍は、北条方の抵抗を各地点で粉碎。苦戦を強いられた極楽寺坂では、義貞が竜神に祈って稲村ヶ崎迂回に成功し、中心部に迫った。

北条泰家の計略 (146～151)

幕府滅亡が迫るのを知った北条高時の弟泰家は、高時の次男亀寿を諏訪上社出身の被官に託して信濃に逃れさせた。泰家も奥州を目指して鎌倉を脱出する。亀寿はのちの相模次郎で、中先代の乱の主役。泰家も時興と名乗って西園寺邸に潜伏し、建武政権打倒を画策する。

(九) 相模入道自害の事

鎌倉幕府滅亡 (p156～161)

得宗高時の下で専横を振るった内管領長崎高資の子、基資は、戦場からいったん東勝寺の高時の許に帰り「今一度、戦って来ます。冥土のお供をするまで待っていてください」と言い残して去った。義貞の首を狙うが果たせず、東勝寺に帰って自害、高時も続いて、元弘3年5月22日、執権北条9代の鎌倉幕府は滅んだ。

第12巻輪読予定ページ (11月18日)

- (1) 213元弘癸～216帰されける  
(215それ諸仏～216経べし、は読みとばす)
- (2) 216清忠帰参～218壯観なり
- (3) 220同じき八月～223召さる
- (4) 248元弘三年～251飽けり
- (5) 251中にも～254覚えたり
- (6) 260元弘四年～264名誉なり
- (7) 271兵部卿親王～  
274籠め奉る
- (8) 274宮は、一間～  
278あさましけれ